

研究・調査報告書

報告書番号	担当
536	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Older adults' alcohol consumption and late-life drinking problems: a 20-year perspective. 高齢者のアルコールの消費量と晩年の飲酒問題: 20年間の展望。	
執筆者	
Moos RH, Schutte KK, Brennan PL, Moos BS.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Addiction. 2009 Aug;104(8):1293-302. Epub 2009 May 12.	
キーワード	
高齢者、アルコールの消費パターン、飲酒問題	
要旨	
目的: この研究の目的は、高齢女性・男性のここ20年でのアルコールの消費パターンの変化を特定して、ガイドラインで定義された深酒と晩年の飲酒問題との関係を検証することであった。	
デザイン、参加者、測定: 地域住民で、baseline時かそれ以前に飲酒していた55～65歳の719人が参加した。10年後と20年後に飲酒量と飲酒問題について調査した。	
調査結果: 年齢が70～80歳代に達する20年後には、深酒の頻度は低下した。しかしながら、75-85歳のときには、27.1%の女性と48.6%の男性が、1日あたり2drink以上飲むか1週間あたり7drink以上飲んでいて、匹敵するガイドラインレベルでのアルコール消費量の男女を比べると、高齢男性は、高齢女性より飲酒問題が多い傾向にあった。深酒を特定するための潜在的保守的ガイドラインとされる、1日あたり2drink以上の飲酒や、1週間あたり7drink以上の飲酒は、飲酒問題が起こることと関連していた。	
結論: 飲酒する高齢者のかなりの割合がガイドラインで定義される深酒をしたり、飲酒問題を抱えたりしている。ガイドラインでの定義レベルを超えて飲酒する際、老人男性は、老人女性より問題をかかえやすいという調査結果は、男性の飲酒ガイドラインが女性の飲酒ガイドラインより飲酒量の設定値を高くするべきでないことを示唆する。	